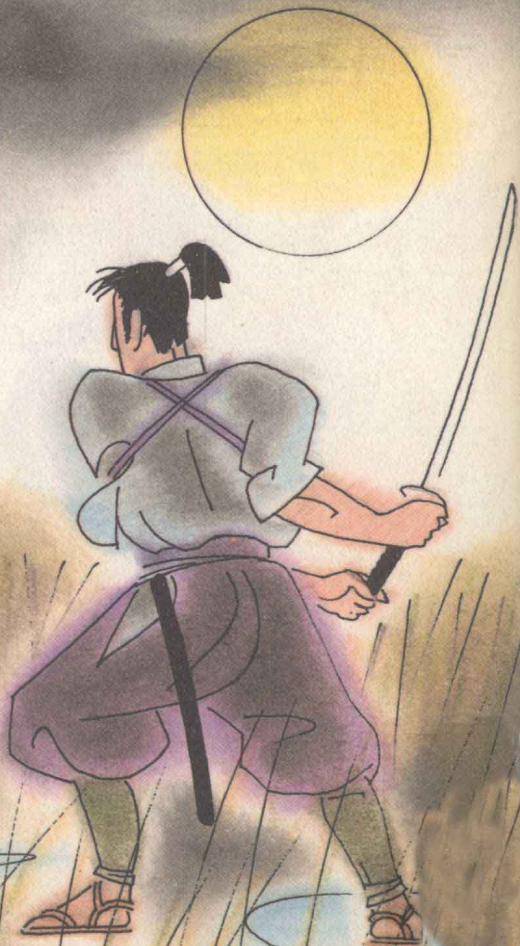


日本劍客伝・四

針谷夕雲・有馬頼義

高柳又四郎・村上元三



有馬頼義（ありま よりちか）
1918（大正7）年、東京生まれ。
1980（昭和55）年没。

村上元三（むらかみ げんぞう）
1910（明治43）年、東京生まれ。

日本剣客伝 4 針谷夕雲・高柳又四郎

昭和57年5月20日 第1刷発行

定価 360 円

著 者 有馬頼義・村上元三

発行者 初山有恒

印刷製本 凸版印刷株式会社

発行所 朝日新聞社

〒104 東京都中央区築地 5-3-2

電話 03(545)0131（代表）

編集＝図書編集室 販売＝出版販売部

振替 東京 0-1730

© YORINAKA ARIMA & GENZO MURAKAMI 1982
Printed in Japan 0193-260864-0042

日本劍客伝 4 .

針谷夕雲 高柳又四郎

有馬頼義 村上元三

朝日新聞社

目次

針谷夕雲 有馬頼義

夕雲は何処にいる 9

蜂 20

匙 32

放浪 44

小田切空鈍 55

おんな 67

月 80

転帰 92

高柳又四郎 村上元三

狐の嫁入り 107

霧の中 118

母と子 130

藤枝の雨 142

中西一刀流 153

音無しの勝負 165

女の匂い 176

江戸の春秋 188

小三郎少年 199

雪の試合 211

直刃の大刀 223

影 236

中山七里 248

日本劍客伝 4

針谷夕雲

はりがやせきうん

有馬頼義

『週刊朝日』昭和四十三年四月十九日号、六月七日号掲載

夕雲は何処にいる

一

次頁の図が、針谷夕雲はりがやせきうんの前後左右をとりまく剣術流派の系譜である。綿谷雪氏わたたにきよしの「図説・古武道史」などに、掲載されているものだ。この夕雲流、無住心剣、破想流という流儀がどんなものかと云えば、前掲の「図説・古武道史」のほか、富永半次郎氏の著書「剣道に於ける道」にくわしい。

江戸時代に於ける、宮本、小野、柳生、千葉等著名な剣客の中で、針谷夕雲が最も強かったという伝説があるが、夕雲は、以上の剣客を含めて、同時代の誰とも、一度も剣を交えていないのである。実際に誰かと試合をして、勝ったとか負けたとかいうことで、強かったとか弱かったということではなしに、武芸では、実技と全く無縁な人が、強かった、と云える場合があることを、まず納得しなければならぬ。それは例えば、宮武が金田の球をホームラン出来たかどうか、という風な議論に似ている。ある人は、勿論宮武もつろんは金田を打っただろうと云い、またある人は、宮武時代の単純なバッティングでは、金田はおろか、稲尾や小川健太郎さえ打つことは出来なかつ

（新陰流）
上泉秀綱

（奥山流・神影流）
奥山休賀齋公重

（真新陰流）
小笠原上総源信齋長治

（直心流・紙屋流）
神谷文左衛門尉伝心齋（紙屋頼春）

（真の新陰流）
小林市郎右衛門養仲

永野源作政良

（夕雲流・無住心劍・破想流）

美濃部団三郎茂雅

針方谷五郎右衛門夕雲

小田切一雲空鈍

（真里谷流）

真里谷円四郎義旭

税田新八好教

宇野小軒

鷲尾八兵衛

片岡伊兵衛

中村権内

加藤田新作武述……

加藤田平八郎重秀

（加藤田新陰流）

奥村七郎（園田円齋）

松崎浪四郎

田川七右衛門

（弘流・雲弘流・天真流）

井鳥助之進巨雲

井鳥調心景雲

比留川雲海保教（比留川流）

矢橋助六

小山宇八郎重之

ただろう、と説くに違いない。したがって、針谷夕雲という剣客が強かった、ということは一応前提として認めておきたい。

しかし、針谷夕雲という人物の生涯は、霞につつまれたように定かではない。一説には、上野国針谷に生れたとし、また一説では、今の埼玉県大里郡岡部大字本郷字針谷（現岡部町針ヶ谷）とあり、他にも茨城県猿島郡総和村大堤（現総和町）というのもある。上野国針谷というのは地図では見当らず、現在宇都宮市の字に針谷というところがあるので、それかとも思える。私は、この三箇所を訪れ、県庁、町役場、郷土史研究家などをしらみつぶしに調べたが、何ら実証出来なかった。誰も、その名さえ知らない。

夕雲の口述した奥儀を書き残したのは、渋谷の東福寺という禅寺の虎伯和尚だという資料があったので、探してみたが、東福寺はあったが、これは天台宗で、寺の資料には虎伯和尚の名はない。口伝もない。渋谷、目黒かいわいの寺を悉く当たってみたが、成功しなかった。

また資料によると、夕雲が死んだのは、寛文二年（七十歳）没というのと、寛文九年（六十歳位）没という二説がある。死んだ正確な年月日がわかっていれば、逆算して生年を知り、そこから何かヒントが出るかと思うのだが、寛文二年に七十歳というのと、寛文九年に六十歳というのでは、その二説の間に十七年のひらきが出て来る。没地は江戸八丁堀だということはわかっているが、今の八丁堀には昔の面影はない。こう考えてくると、針谷夕雲という人物は、ほんとうは存在しなかったのではないか、と思いたくなるが、「夕雲剣術書」というものが、ちゃんと残っているし、前掲の流派の系譜も信憑性があるから、全く実在しなかったとは云いきれないのである。

いつたい、どうしてこういうことになったのか、私には皆目わからないが、書け、と云われてひき受けたのは私であり、それについては責任がある。それ故に、私はこの連載中、前から続いている連載小説をのぞいて、五月頃までの約束を、早く書き上げてしまつて、少なくとも二カ月は（準備期間をいれると一年余になるが）ほかの仕事はしないことにした。

この剣客伝の第一回の広告が、週刊朝日に出たとき少なくとも私の知っている範囲の友人知己たちの誰もが、針谷夕雲の名前を知らなかった。彼等、特にこのシリーズの執筆者の一人である吉行淳之介は私に、「何でお前さんは変なのを引き受けたんだ」と云った。

何でだか知らないが、その時は、私は自分が無学で、夕雲を知らないのだとばかり思っていたのである。それが調べはじめると、全く見当違いで、夕雲を知らない方が当り前だということになつてしまった。それで前述のような、一年以上という暗中模索がはじまつたのである。

大体歴史ものを小説家が書く場合、資料があればそれを使い、時に新解釈をするという方法が一つある。もう一つは、人物をつくつてしまうことがある。今度の場合、やむを得ず後者を選ばなければならぬが、人物をつくると云つても、文学作品は講談ではないので無責任ではない。論理の積み重ねで、人物像をこしらえて行くのである。更に云えば、夕雲の場合、晩年のこの方が比較的わかつてるので、逆の作業をしなければならない。つまり、この年齢でこうだったのだから、三年前は、こうであつた筈だ（^{はず}）という推理を使うわけである。人間分析と、論理が頼りなのだ。

しかしそれにしても、一生に一度も剣を抜かずに、夕雲流という剣法をあみ出したというのは、実に不思議と謂うべきである。それは偶然かもしれないが、実際には必殺剣と向い合ったことはあるかも知れない。後にのべるが、夕雲流の極意は「相抜け」というのであって、他の剣客と立合ったのかも知れないが、剣、もしくは木刀を合わせてはいない。これを単純に考えると、夕雲という奴が、雲をつくような大男であったとか、眼光炯炯、見合っただけで、相手がすぐんでしまつて勝負に到らなかつたかということも考えられるが、そうではない。「相抜け」の極意は、ちゃんと理論化されて、弟子の小田切空鈍によって後世に伝えられているのである。そこで私は人間の闘争の、ありとあらゆる場合、人間の生い立ちや、性格や、生活の、ありとあらゆる場合を考え、消去法によつて、針谷夕雲という一人の偉大な、しかし哀れな剣客を、つくり上げたのである。したがって、これは、針谷夕雲の正伝ではない。外伝ですらないだろう。私の、針谷夕雲なのだ。

二

私は、たまたま今、野球を引き合いに出したが、野球では、試合をしないうちに、参りました、というわけにはゆかない。いづれにしてもバットとボールは触れ合うし、野手のグラブの中にボールがはい入る。しかし、夕雲流の「相抜け」の極意を考えているうちに、野球にもそれに似たものがあることに気付いた。もともと、投手と打者の対立の中には、技術以外に、精神的なものが多分に含まれている。打者の方から云うと、実際もう打たないでも、三振で結構です、という風

な気持ちになることがある。そこで、投手と打者の精神的対立というものが、剣法に似ていると思うのである。

私は過去三十五年間位野球をやり、特に投手として働いた期間が長かった。ここ五年程の間は、母校の大学の監督になって、東都大学リーグ戦に出ていたが、私は投手達に対して、三振を要求したことはない。野球では三人アウトにすればチェンジである。九回完投して完全試合をしても、投手の投球数は百球近くなる。それで私は、自分もそうだったが、一試合の投球数を出来るだけ少なくしようと考えた。九回二十七人の打者に対して、悉く三振にとれば、二十七人ですむ。しかしこれは不可能なことだ。もし投球数を更に少なくしようとするなら、一人の打者に対して、一球ですませる以外はない。つまり三振をとってはいけないのだ。打たせる。そして、三球投げてチェンジにする。私は過去三十五年の間に三回やった。

これは重大なことだから書いておくが、三振をとるということは、剣の道でいうと相手を確実に殺すことだ。しかし三球チェンジは、殺すことになるかも知れないが、自分は全く精力を使わない。さて、三球チェンジの要領は、相手に、こっちが必らずストライクを投げて来ると、信じさせることだ。そして第二に、そのストライクが極めて打ち頃に見えることだ。第三に相手が焦っていることが必要条件になる。この三つの条件があり、あたかもホームランでも打てそうなストライクが、打者の手許で、微妙に変化すればいい。

私は大学の監督在籍中に、三人の投手を育てたが、その中で一人だけ、私の論理を理解してくれ、三年間の投手生活の間に、二回、三球チェンジをやったのけた。投手の最大の名誉は、三振

奪取王でもなければ、完全試合でもなければ、最多勝利投手になることでもない。三球チェンジを何回やるかということだと、今でも私は信じている。つまり無念で投げて、どうでも打ってくれ、という心境である。夕雲の「相抜け」というのは、そういうことではなかったのだろうか。

では、何故、針谷夕雲が、そういう方向に向ったか。第一は、時代的背景である。即ち、戦国時代の実用剣が不要になり、それが論理化されていった時代に当る、ということである。第二に、夕雲の経験が、身体的状況が、やむを得ず、そういう方向に彼を向けた、ということであり、多分、両方の必然から、夕雲流が生れたのであろう。夕雲流の流儀が、理論的に完成されたのが、夕雲の晩年であった事実から、私はそう推論した。そして、たまたま、最近手にはいった資料によって、針谷夕雲の生涯というものが、私のつくった夕雲像と、かきなり合いはじめた。

前述のように、生年月日と死没の年が明らかでないから、針谷夕雲は、慶長の二ヶ代生れの寛文ひとヶ代死没という、漠然とした一生を想定しておくことにする。生地も、はっきりさせない。上野国針谷と謂われる幻の土地にしておく。死没地は、江戸八丁堀。それでも、ここに一人の剣客がその一生を生きたという意味はあるだろうと思う。したがってここには、副主人公として、名の知れた人物は一人も出て来ない。夕雲の周囲にいたと思われる人物は、前述の虎伯と、弟子の小田切空鈍の二人きりである。

私はこの調査中に、逆に、虎伯の線をもっと洗ったら、何か出て来るかも知れないと考え、渋谷、目黒の辺にないとすれば、寺の名前が間違っているのかと思ひ、それで、編集の人にもわざわざ、東福寺という名にとられずに、東京都内にある禅寺のすべてに、電話をかけてみたの